第１回　安城市民ギャラリー運営委員会（議事録）

令和５年５月１１日（木）
午後４時～午後５時
歴史博物館　講座室

出席者
委員：神谷会長、丸山副会長、齋藤委員、山本委員、香村委員、加藤委員
事務局（市）：石川教育長、加藤生涯学習部長、邨澤文化振興課長、平井係長、
谷村主事、永坂主事補、錦見社会教育指導員
指定管理者：井上総括責任者、早川副総括責任者

１　市民憲章唱和
　人事異動説明
２　あいさつ　石川教育長

３　協議事項
（１）令和４年度安城市民ギャラリー利用状況について
（２）令和４年度安城市民ギャラリー事業報告について

	（事務局、指定管理者による説明）
委員	美術講座は毎年同じ方が継続して受講していることが多い。それは仕方のないことではあるが、もう少し新規の参入者が増加するようになっていただきたい。
委員	しかし、版画講座のおかげで、安美展版画部門の出品数が増えているのではないか。
事務局	版画講座の影響で出品が増えたとあったがそれだけではなく、書の出品も増えてきている。
委員	「日本画大作（２０号）に挑戦」講座はなかなか初心者が手を出せないものに挑戦できるいい企画なので、是非今後とも続けていってほしい。
委員	特別展の「砺波市・安城市交流美術展」は市民ギャラリーに普段はいらっしゃらないような方が来館されていて、市民ギャラリー

	を知ってもらう良いきっかけになったのではないか。
委員	砺波展は普段安城市民ギャラリーに展示されないような、規模の大きな作品を市民に閲覧していただく機会を創出できたのではないかと考える。砺波市とは文化協会同士の交流会を行っていたが、砺波市へ作品を持参するため、作品のサイズが小さくなりがちだった。両市大きな作品が展示できたのも良いことだった。

（３）令和５年度安城市民ギャラリー事業計画について

	（事務局、指定管理者による説明）
委員	昨年の「あつまれ！いきものたち」展もそうだが、今年度の「美術で味わう　市民ギャラリーレストラン」展も子どもが取り組みやすい題材だと思う。芸術に携わる人々の高齢化が進んでいるので、芸術に興味を持ってもらうきっかけを若者向けに企画していってほしい。
事務局	「市民ギャラリーレストラン」展は食べ物だけでなく、収穫風景や食事中、調理している最中の様子など、多様な食を扱ったテーマとしている。子どもたちにとって、多様な食べ物への視点を捉えるきっかけとなればいいと考えている。また、当展では収蔵品も展示する予定である。「市民ギャラリーレストラン」は当初、静物画をテーマに考えた企画展だったので、鑑賞する子どもたちがそういったものに触れる機会にもなると想定している。
委員	セロテープアート展は昨年度もワークショップがにぎわっていた印象がある。今年度も実施するのはどうか。
事務局	ワークショップは今年度も実施することを予定している。
委員	セロテープもそうだが、若い世代が多様な素材に触れるきっかけがあるのは良いことだ。自分も最近陶芸に触れてみたが、土に触るという経験はワクワクした。こういった講座が増えていくと良いと感じる。
委員	土に触れるという機会は少ないので、親子でできる機会を創出していってほしい。 また、作るというだけでなく、触れるということも重要である。

	子どもには様々な物に触れてもらいたい。触れる展示といったものも良いのではないか。
委員	幼稚園の子に書に触れてもらうと、鉛筆より筆に興味を持っていた。
委員	様々な素材に触れる体験は貴重である。最近はデジタルで水彩などの多彩な表現も可能だが、実際に画材に触れたり、体験するということも同様に大切にしていきたいと思う。
委員	芸術に限った話ではなく、自然に触れるというのが子どもには必要だ。
委員	過去に見た展示で、ニカワに触れるというコーナーがあった。そういった原料に触れる機会もあると良い。
委員	自分が過去に見た中には音楽を流した展示もあった。また、展示時だけでなく、制作中に音楽を流すのも高揚感が生じて良い。
委員	グループ展と音楽のコラボはできないか。
委員	過去に自然音を集めて展示を行ったが、ほとんど音が目立たなかった。歌手に歌ってもらうことも考えたが、断られた経験がある。
委員	現状、市民ギャラリーは音楽を流すことを想定した構造ではない。音響設備を市民ギャラリーで用意して、借りられると助かると思ってはいる。
委員	展示の中の企画でミニコンサートを実施したことがあるが、観覧中の方や、他展示室を利用している方々には気を遣った。大きすぎては迷惑をかけるし、小さすぎては聞こえない。どの程度の音量で音楽を流すか、綿密な打ち合わせが必要である。
委員	若手作家の中にはインスタレーションの展示も行っている方もいたという。音楽と美術の融合は今後ひとつのテーマになっていくかもしれない。
事務局	美術と音楽の融合は刺激的だった。制作中に音楽があると筆が進むというのも新しい知見だった。

その他

事務局	・企画展「安美展第８０回記念展」のご案内